

高校倫理教科書における青年期の課題についての考察

白 石 忍

1 はじめに

公民科の学習指導要領を見るたびに、憂鬱な気分におそわれるのは私一人だけだろうか。学習指導要領は、教科全体の「目標」に始まって、各科目の「1 目標」「2 内容」「3 内容の取扱い」という構成で成り立っているが、その文言は抽象的表現を駆使し、それはそれは誠に勝手なと思う程、完璧なまでの理想を打ち上げている。そんな完成された生徒、そんな素晴らしい人間などどこにいるのかとってしまう。もっと、地に足の付いた、地道な教育の道標はないものだろうかと思うのである。

2 学習指導要領

平成21年3月告示の学習指導要領公民編倫理は、「目標」で「青年期における自己形成」を謳い、「内容」では「青年期の意義と課題を理解させ、豊かな自己形成に向けて、他者と共に生きる自己の生き方について考えさせる」としている。

平成11年3月の改訂と平成21年3月のそれとで「目標」の文言を比較して目に付くのは、前者の「人間尊重の精神に基づいて」となっているところが「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念に基づいて」と加筆された部分と、「生きる主体としての自己の確立を促し」が「他者と共に生きる主体としての自己の確立を促し」とこれまた、文言が加筆された部分があるということである。

しかしながら、「生命に対する畏敬の念」や「他者と共に生きる」が平成11年版に全く見られないということはない。「生命に対する畏敬の念」は「(2)イ 現代に生きる人間の倫理」で「人間の尊厳と生命への畏敬」とはっきり示されているし、「他者と共に生きる」は「内容」の「(1)ア 青年期の課題と自己形成」で「他者と共に生きる自己の生き方について考えさせる」と説明されていたり「(2)イ 現代に生きる人間の倫理」で「他者と共に生きる自己の生き方にかかわる課題として考えを深めさせる」とあったりする。

したがって、ここで解釈しておくことは、これらはけっして目新しいことではないがこの二つを敢えて「目標」に取り上げたということは、この十年間の流れの中で、「生命に対する畏敬の念」や「他者と共に生きる」という部分が特に強調されなければならない社会的状況の変化、

あるいはそれをより必要とする社会環境がそこにあるということなのである。

凡そ、倫理を取り扱う「倫理」の授業においては、社会の革命的变化とそれに伴うイデオロギーの入れ替えでもない限り、良(善)いこと、悪いこと等が10年やそこらでくるくる変わるわけがない。いや、仮に、社会の革命的变化とそれに伴うイデオロギーの入れ替えをしようとする行政的作為があったとしても、人間の本性に深く入り込むという意味の倫理においてはやはり、良(善)いこと、悪いこと等が10年やそこらでくるくる変わるわけがないと言わざるを得ない。

したがって、上記は、バランス上、今回は少し、「生命に対する畏敬の念」や「他者と共に生きる」を強調した授業構成にしてはどうでしょうかという問題提起として受け止めるのが正解というものであろう。

さて、青年期の課題に関しては、「2 内容」の「(1) 現代に生きる自己の課題」として、

自らの体験や悩みを振り返ることを通して、青年期の意義と課題を理解させ、豊かな自己形成に向けて、他者と共に生きる自己の生き方について考えさせるとともに、自己の生き方が現代の倫理的課題と結びついていることをとらえさせる。

とあり、青年期の課題が「自らの体験や悩みを振り返ることを通して」の延長上の通過項目のように位置づけられている。

また、「3 内容の取扱い」の「(2) ア」においては、

内容の(1)については、この科目の導入として位置付け、生徒自身の課題を他者、集団や社会、生命や自然などのかかわりを視点として考えさせ、以後の学習への意欲を喚起すること。

というふうに、以後の学習に向けてのやはり通過項目、「導入」ぐらいにしか考えられていない。

しかしながら、そうではなく、本論文は、青年期の発達課題そのものを直視しようとするものである。

3 教科書に見る青年期の課題

さて、こういうふうにと考えると、学習指導要領をもとにつくったとされている検定合格の教科書も、10年やそこらで大した変化もない。しかしこう言い切ってしまうと、一方で、それは比較する土俵の大きさや違い(意識の範囲や種類)によっては大した変化でもあるという見方考え方も可能とするので、真意を表出する表現には窮する。要は、現在使用されている教科書、それは主として平成11年に告示された学習指導要領をもとに作成されているのであろうが、仮にそうであったとしても、平成21年3月に新学習指導要領が出たからといって本論考を反故にする程の理由を呈するという程のものではないと考える。

そこで、現在市販され、全国の高校生が使用している倫理の教科書を調査、解析することによって、本題の「高校倫理教科書における青年期の課題についての考察」を行うものとする。また、若干の市販参考書からも、参考書の執筆者は受験倫理の業界では優秀な人達が多いと考えられるので、その彼らが考える「青年期の課題」について調査、解析し、これに考察を加えることとする。こうすることで、青年期に必要と考えられる教育そのもののエッセンスが見えてくるかもしれないという淡い期待もあるのだということをここに告白しておきたい。

(1) 清水書院『新倫理』2006年(平成18年3月)検定済

「第2章 青年期の課題と生き方」ではまず「豊かな自己実現に向けて」の項でエリクソン(1902-94)の「アイデンティティーの確立」を取り上げ、アイデンティティー確立のための要因を次の3点に整理している。

これまでの生き方を肯定しながらこれから先の生き方を考える自分(時間展望)
 他者とのかかわりのなかで対等な関係をもちつづける自分(自己確信)
 社会のなかで自信と責任をもって自分の役割を引き受け、周囲から評価され役に立っ
 ていると意識している自分(役割実験、達成の期待)

さらに、そのためには次のことが青年期前の各時期の年代ですでに獲得されておくと有利だと、いうふうに解説している。

信頼(「人への信頼」は乳幼児期の大切な課題)
 自律性
 自発性
 勤勉性

次の「青年期の課題」の項では、「心理学者達があげる青年期の発達課題にほぼ共通していることは」と前置きして、次の項目を取り上げている。

身体的変化への適応
 両親からの精神的な独立
 情緒的な安定を得ること
 職業観・人生観の確立

さらに、オルポート(1897-1967)の言を取り上げ、「成熟した人格として」

自己感覚の拡大(自己中心的な興味や活動を去り、自分以外の人間や事物に関心を寄
 せること)

自己の客観視(自分の能力・資質や目的・欲求、自分についての判断などを客観的に洞
 察し認識すること)

人生観を持つこと(自己の拡大と客観視を統合して、統一的な人生観を育むこと)

とある。この教科書は、「興味」や「育む」といった漢字にまで読み仮名を振っているのだが、このこととこの高邁な説明にはあまりにもギャップがあると言わざるを得ない。教える側としてはこここのところの不信感が渦巻く。確かに、この教科書では、オルポートの提示した上記の3項目を挙げた後、「これらの課題のすべてを青年期に達することは困難であり、なかには生涯を通じてはじめて達成できるものもある。しかし、私たちが発達課題に積極的にとりくみその達成につとめることは、これからの人生に大きな意義をもたらすことになるであろう」と結んでいる。ある意味では、「素晴らしい、そうだ!」と感動もするし、また、無難に乗り切ったなど言うことなのかもしれないが、どこか、不快感、不信感、無責任感が沸き上がることも禁じ得ない。

(2) 東京書籍『倫理』2007年(平成19年3月)検定済

この教科書は、「2 青年期の課題と生き方」で、「主体性の確立」「自己理解」「幸福と生きがい」の項立てをしているが、取り立てて青年期の課題を整理するというふうにはなっていない。「主

体性の確立」の項ではアイデンティーの確立という説明でエリクソンを出し、自己実現の追求という説明でマズロー(1908-70)を出している。続く「自己理解」では「主体性の確立にとって、自分を正しく理解しておくことは欠かせない条件である」という考え方のもとで、フロイト(1856-1936)、ユング(1875-1961)、クレッチマー(1888-1964)、オルポートといった心理学者の説を紹介している。「幸福と生きがい」では、コラムで「生きる意味」と題してフランク(1905-97)のことが紹介されている。

本教科書では、このように、特に取り立てて青年期の課題を整理してはいない。

強いて取り上げるとすると、アイデンティーの確立の説明で、「自立した人生を送るためには、主体性の確立が問題となる。エリクソンによると、これは『アイデンティーの確立または達成』の問題であって、心理・社会的モラトリアムとしての青年期の重要な発達課題である」と記述しているところぐらいである。

どうも、これには理由(ポリシー)があるようである。「第1章 青年期の課題と自己形成」の最終を飾るコラムでは、「自分探しの罨」と題して次のような説明がある。すなわち、先行き不透明な時代に漠然と感じる不安の中で一人秘かに悩む青年期の様々な疑問に対して、『これが答えだ!』『あなたが生きるべき道はここ!』などと断言してくれると、悩み考えるのに疲れていたきみには、それが『救いの言葉』に聞こえるかもしれない。しかし「ありきたりの世間の答えに満足できずに悩んでいたはずなのに、『本当の自分』を探して苦しんでいたはずなのに、その悩み苦しみがつらくて、『だれか』が示してくれた答えに何の疑問も感じずにしたがってしまう。その矛盾にぜひとも気づきたい」という確固とした見解があるからであろうと考えられる。

(3) 山川出版社『(東学版)倫理』2002年(平成14年3月)検定済

本教科書は、あくまでも現代の、今の社会に生きる青年という視点から、「現代の青年を取り巻く社会の変化を概観し、青年自身の意見を聞きながら、これからの青年の生き方について考えていこう」とするものである。

したがって、教条的な姿勢は外されている。

そこで、まず、豊かな社会環境にあるという現代の特有性を受けて、「自立が遅れたり、社会性が欠如したり、他者への関心を喪失していく」現象に見舞われる一部の若者の問題点(課題)が明記されている。「社会に対する無力感や非社会性」の傾向についても指摘している。

そこで、「いま若者に求められるのは」

自分の体を自分でコントロールする(術を身につける)

自分を理解する(自分の内面を見つめ直すことで)

そして

自分たちの可能性をみつけ、新しいライフスタイルを創造していく(姿勢を持つ)

世界観や人生観についての考察を深める

という、行動指針であって、結果を強く要求するという記述にはなっていない。行動化を促すメッセージを強く出しているのは、それだけ社会の変化が激しく、その変化も常に流動的という認識があるからであろう。頼りないが、的を射ているのかもしれない。

(4) 山川出版社『現代の倫理』2006年(平成18年3月)検定済

本教科書は、「青年期の課題」という発想を持たない。「青春を生きる」(第1章)というテーマで青年期の実相を列挙しているが、それは、青年期の痛みに肉薄するというような書き方ではなく、人間一般にも当てはまるというようなものも含んでいる。マルチン=ブーバー(1878-1965)の「われと汝」の考え方を取り上げたり、シュブランガー(1882-1963)の「性格の類型(タイプ)」をとりあげているのも、そうした姿勢からである。

第1章の記述に先立って、「プロローグ…終わりなき旅」のコラムを設け、ミュージシャン Mr.Childrenの『終わりなき旅』で「誰の真似もすんな／君は君でいい／生きる為のレシピなんてない」と歌われていることを紹介している。そして「人生というステージにのぼり、まだ、何もかかれていない白いキャンバスに自分らしい生き方をえがくために、これから自分の生き方を見つめてみよう」と、ことさら出発点であることを強調している。

(5) 実教出版『高校倫理』2007年(平成19年3月)検定済

本教科書の「第1章 青年期の課題と自己形成」は、僅か8ページである。「第1節 青年期の意義」は、「孤独な自己」というトーンで、第二の誕生、マージナルマン、第二反抗期、疾風怒濤の時代、モラトリアムが4ページで説明されている。「第2節 青年期の課題」は「将来を考える」というトーンで、マズローを引き合いに「自己実現の欲求」を、適応行動からパーソナリティーの形成を、防衛機制を通過点にしてアイデンティティーの確立を推奨している。そして、この項4ページながら、コラムや註の体裁にして、ハヴィガースト(1900-91)とオルポートの説で一気に入りに片付けている。

「アメリカの教育学者ハヴィガーストは、青年期の発達課題として、次のようなものをあげている」として、

- ①同世代の同性・異性の友人との洗練された人間関係をつくること
- ②社会的な役割を理解すること
- ③両親や他のおとなから情緒的に自立すること
- ④経済的独立、職業選択や結婚、家庭生活のための準備をすること
- ⑤社会的責任のある行動を求め、かつなしとげること
- ⑥価値や倫理の体系を学習し、適切な科学的な世界像を形成すること

「アメリカの心理学者オルポートは『成熟した人格』の条件として」として、

- ①ひろく拡大された自意識
- ②温かい人間関係の構築
- ③情緒の安定と自己の受容
- ④現実的な外界の認知と思考
- ⑤社会の現実的な対応
- ⑥人生観の確立

をあげている。学説の背景も意識も持たないで、執筆者が勝手な思い込みで青年期の課題を書き込むのもどうかと思うが、学説だけで済ますのもまた、どうかと思うところである。

(6) 第一学習社『倫理』2006年(平成18年3月)検定済

本教科書は、他の教科書とは全く逆に、記述順序が倒置的になっており、ずばり「発達課題」という項立てで、青年期の様々な特徴などを記述する前にこれを端的にもってきている。

まず、ホリングワース(1886-1939)の説をあげている。

- 心理的離乳とこれにともなう葛藤の解決
- 性的関心と異性への適応
- 自立の達成
- 世界観の形成
- 自我の発見

そして、「青年期の発達課題には諸説あるが、それらの共通点としては」と前置きし、7項目を挙げている。

- ①アイデンティティーの感覚の発達
- ②変化するからだへの適応
- ③抽象的思考の発達
- ④対人的技能の獲得
- ⑤家族との新しい関係の確立
- ⑥価値体系の確立
- ⑦将来の目標の設定

こうしておいて、後から、エリクソンの「アイデンティティーの確立」説を出したり、「自我のめざめ、あるいは自我の発見」や「親子関係と自立」を記述している。

これには執筆者の姿勢に、青年期の課題とは言うけれど多くは一生掛けて意識する課題でもあるのだというふうなことを伝えたい、ということがあるからであろう。例えばアイデンティティーについては「アイデンティティーの確立」の説明の項のさらに後に「生涯発達」という別の項立てで「人生の節目節目にアイデンティティーは問われてくる。そしてその危機を乗り越えることで、パーソナリティーは生涯にわたって発達し、より確固としたアイデンティティーが確立されていく」という記述をしているところにも見て取れる。

(7) 数研出版『倫理』2006年(平成18年3月)検定済

本教科書は人間が「矛盾をかかえた存在」であり、(青年期も)「青年期あるいは若者文化の存在は、人類の歴史的・文化的・地域的状况によって生じたものであり、普遍性をもつわけではない」という姿勢に立っている。だから、「2 青年期の意義と課題」と題していても、青年期を「一人前の大人として自立するため」の「社会化の過程」という意味で意義ある時期という発想に立っている。「現代に生きる私たちにとって青年期は、自由と責任、権利と義務をわきまえた自立の人間になるために欠かせない重要な準備期間なのである」と述べる程度で、そう言いながらもんびり構えている。青年期の諸所の問題を深刻な課題として受け止め克服せよ、というような姿勢ではないのである。したがって、「青年期の課題」と題する項でも、「産業化・情報化が高度に進展し、巨大化した組織の管理・運営のシステムとしての官僚制が極度に発達している」現代社会において「一人前の大人として自立するためには」せいぜい

高度で専門的な知識や技能を習得する

高度な知識や技能を発達させる
 自分の価値観を確立させる
 他人と協調し共生できる態度や能力を身につける

こと等が重要課題の一つと言えるかもしれない、といったふうなトーンに立っている。

(8) 教育出版『新倫理』2006年(平成18年3月)検定済

本教科書は全く新しいタイプの教科書である。これまで見てきたような「青年期の課題」と題するような項立てはどこにもない。せいぜい「子どもと大人」という項があるくらいで、ことさら青年期に執着していない。産業社会の発達の中で「子どもから大人への過渡期である青年期が浮かび上がった」にすぎないという意識が強い。

したがって、モラトリアムの期間がますます長くなってきているなかで、「どのように働き、どんな社会生活・家庭生活を送るのか、人生のかたちは人それぞれによって異なるだろう。こうしたなかで自分の人生を自分自身で選び取る力をつけることが青年期の大切な課題となる」というところが、敢えて取り上げると、記述していると言えなくもないといった程度である。

「大人になること」の項では、「大人であれば安定した自我をもち、社会的役割を自覚して、自らの職業に励む、そして家族を形成して、と考えれば考えるほど、大人になることは難かしく感じられる」と皮肉っているほどである。そして「でも実は、朝自分で決めた時間に一人で起き、自分の生活を支えるお金を自分で稼ぎ、食事の支度や、洗濯など、生活のこまごましたことを自分一人でごこなせるようになること、そんな単純なことが大人になることかもしれない」と括っている。

考えさせられる文言ではあるが、この記述ではあまりにも「私小説」的で、公民科、社会科としての何か大きなものが欠けてはいはないか。

いや、それほどまでに、現在の青年は追い込まれていると言うことだろうか。

(9) 実教出版『倫理』2003年(平成15年3月)検定済

本教科書は、青年への撒に充ち満ちている点で他の教科書とは変わっていると言えよう。

まず、「青年期の自己形成」の項で、「きみたちは、人間の特質や青年期の特徴をよく理解したうえで、人間についての多くのすぐれた思索のあとをたどりながら、本当の自己を形成するようにつとめなければならない」と撒を飛ばしている。

「第1章 青年期の課題と自己形成」の最終節「第4節 青年期の課題」では、いきなり「青年は、心理的な動揺や葛藤を経験しながらも、少年期の自分をのりこえ、新しい自立した自分をつくりはじめる」と決めつける。進路選択についての説明では、青年は将来に様々な可能性が開かれているので、「どのような進路を選択するべきかについてとまどい、悩むことも多い」と共感しながらも、「(進路を決定するということは)「自分の将来の生き方を選びとることを意味しており、青年期の重要な課題である」と回答し…どうも、感性的に整合してこない。やはり、撒なのであろう。この章末尾はエマソン(1803-82)を引いて次のように括っている。

社会の未来は、青年によって作りだされていく。アメリカの思想家エマソンは、「なんじの馬車を星につなげ」といつている。これから未来にむかって価値ある人生を送ろうとする青年ならば、遠くかがやく星のような理想をもつべきである。青年のい

く理想こそ、いつの時代でも社会のあり方を変えていく原動力なのである。

これが、青年期の課題と言えるのかどうか、とにかく、やはり青年への檄であると考えられる。

4 参考書に見る青年期の課題

(1)『速読速解 倫理』(東京大学受験公民研究会編著 Gakken(学習研究社) 2009年8月)

この本は、青年期について「青年期には、周囲に望まれる姿となっていく社会化と、自分らしいと思える姿になっていく個性化が同時進行している」と述べているが、その記述にはどこかしら客観的、クールな雰囲気漂う。発達課題については「発達課題とは、人間の成長過程を区分したものである発達段階において、次の段階へ進むために達成すべき課題であり、一般的には各段階に属する者全員に共通している。人間の発達は一生継続くものであり、それぞれの時期で達成すべき発達課題同士の関連性は深い。時には発達課題の達成に失敗することもあり、青年期において達成に失敗すると逸脱行為が出現することもある」と記述して、この他に、特段のメッセージはない。受験参考書という役割上、このような記述にしているのかもしれないが、教科教育という視点からすると、やはりどこかクールだなーと言わざるを得ない。

(2)『センター試験のツボ 倫理』(中川雅博著 桐原書店 2009年7月)

著者は河合塾講師で、「国際倫理の行方を探る研究者」であるらしい。2007年には、「ロシア精神史における戦争道徳論の系譜について」(『倫理学年報』)で日本倫理学会「和辻賞」を受賞している。かなり個性的な書である。著者の得意な西洋思想から始まっているが、その記述もユニークである。著者の存在感が迫ってくる。著者独自の言語で精一杯に記述していて、他者の追従を許さない画期的な参考書となっている。青年期の課題は「第3編 現代社会論」というかたちで出てくる。しかし、不得意分野なのか、関心がないのか、それとも受験上は問題化されにくいと考えているのか、青年期の課題そのものにはほとんど触れていない。コラム「ここがツボ!」で「多種多様な言葉で青年期は語られます。古い概念も少なくありません。大切なのは偏見にとらわれずに解答すること。たとえば、『青年はアイデンティティの確立に悩むが、大人は悩んでいない』というのはウソです」とある。「第1編 西洋思想」での熱の籠もりようからすると、やはり専門領域ではないし大学受験予備校での経験であって高校教諭のような授業を経験していないということからくる記述と考えてよい。

(3)『理解しやすい 倫理』(藤田正勝編著 文英堂 2006年3月)

著者は京都大学大学院教授で『高等学校学習指導要領解説 公民編』の「倫理」で作成協力者名簿にも名を連ねている。それだけに、青年期の発達課題についてきちっと向き合っている。この書は表紙に「教科書マスターから受験対策まで」と銘打っているとおり、教科書を十分補完して余りある記述になっている。したがって、様々な角度から青年期に向き合い、記述し尽くしている感がある。「青年期の終わり」の項では

身体的・生理的成熟

心理的・精神的成熟

社会的・経済的成熟

を挙げ、それらについては分かりやすく読者に説明している。

「青年の課題」の項では、「人間として成熟していく過程にある青年期には、自立したおとなになるための課題がある」とし、それも、「真の『おとな』のあり方を模索していくことが、青年に課せられた課題であろう」と語りかけている。具体的には、「家庭を形成する人として、社会を形成する人として、さらには人間としての責任をになうことが出来る人として成長していくことである」と書いているが、この文言からは、倫理にありがちな格好ばかり取り繕ったうわべだけの表現という感じがしない。著者がこの問題に誠実に向き合っているからであろう。

先の文言はさらに続く。「いいかえれば、単に社会的に適応する能力を身につけるということだけでなく、主体的な人間としての成熟を重視しなければならないということである。」

さらに、著者は「こうした観点から、青年心理学の研究者は、ふつう次のような条件を、青年の発達課題としてあげている」として、それを五つ記している。この五つは青年心理学の研究者達の論を著者なりにまとめたものであり、高校生に分かりやすいように語りかけたものとなっている。それを、以下に示す。

- ①健康な身体をつくりあげ、身体的変化(性的成熟を含む)に適応すること。
- ②おとな(とくに両親)によりかかることから抜け出て、精神的に独立していくこと。
この経過のなかで、おとなとの葛藤をしだいに解消していくこと。
- ③同性および異性の友人に対する相応しい態度をつくりあげ、社会性を身につけること。
- ④将来の目標を定め、そのために必要な教養・知識・技術の習得に努めること。
- ⑤何が正しく、何が悪であるかの基準にもとづいて、自己の人生観を確立するように努めること。

あとは、ハヴィガーストによる青年の発達課題としての10項目、オルポートの説である成熟した人格の条件としての3項目、さらにエリクソンによる発達課題としてのアイデンティティーの確立を取り上げている。

ハヴィガーストによる青年期の発達課題は、実教出版版教科書『高校倫理』では、先述のごとく6項目であったが、本書では10項目として示されている。

- ①自分の性格を受け入れ、身体を効率的に使う。
- ②男性あるいは女性としての社会的役割を身につける。
- ③親や他のおとなから情緒面で自立する。
- ④同年代の男女と新しい成熟した関係を結ぶ。
- ⑤結婚と家庭生活の準備をする。
- ⑥職業につく準備をする。
- ⑦経済的独立について自信を持つ。
- ⑧市民として必要な知識と態度を発展させる。
- ⑨行動の指針としての価値観や倫理体系を身につける。
- ⑩社会的に責任ある行動をとりたいと思い、またそれを実行する。

オルポートについては、清水書院版教科書『新倫理』と同じような記述になっているが、「成熟した人格の条件」の第1項目を「自己の拡大」として、「自己中心的な興味や活動ではなく、自分以外の人間や事物に関心を寄せたり、愛の気持ちを寄せたりすることができること」と記述

している。「愛の気持ちを寄せたりすることができる」という文言は本著者の強いメッセージも同時に伝わってくるという意味合いをもって、この記述の後に続く「エリクソンの見解」では、次のようにエリクソンを紹介している。

エリクソンは、「おとな」は「主として、次の世代の確立と指導に対する関心をもつ人になっている」と述べ、「おとなである人間とは、自分自身を成長させていくことを怠らず、しかも愛あるいは献身によって、他人の成長を促してゆける人間である」とまとめて、そういう「おとな」になるための青年期の発達課題は何かを研究した。

著者の情熱が伝わってきて、高校生向けの記述という意味においては、読んでいて、据わりの良い参考書である。

(4)『よくわかる倫理』(筆名次夫、井上勝、佐良土茂他著Gakken学研教育出版2010年3月)

著者達は、現、前、元の東京都立高校教諭である。文科省からの依頼による仕事も多々してきたし、これまでも教科書執筆で有名な人も多い。

分担執筆からの出発であろうが、最終的には編集会議で意見交換し、全員の理解のもとで世に出したものであろうと考えられる。

しかし、中身には目新しいものがなく、そのくせ、アドラー(1870-1937)、アンナ・フロイト(1895-1982)、ロジャース(1902-87)、ワトソン(1878-1958)、ゴフマン(1922-82)、エリアーダー(1907-86)、さらに、アメリカの心理学者ダン=カイルー、アメリカの発達心理学者エルダー等、他の参考書ではなかなか出てこない学者名がやたらと紹介されている。表紙に「日常学習から入試まで」と銘打っているのもこの影響があるのかもしれないが、論者が若い頃から親しく交流してきた教師達だけに期待はずれの感は否めない。

5 考察(まとめにかえて)

先に、青年期の発達課題については、学習指導要領でこれが「通過項目」程度に扱われているということを描いた。そうではなく、ここでは青年期の発達課題そのものを直視するとも書いた。その意味で、全ての教科書、一部の参考書を読み取って整理した。上述の通りである。そこから見えてきたものは何か。

青年期をことさら熱くとらえて記述したもの、ただ客観的にクールに他人事のように記述したもの、逆転の発想からかどうか、青年期そのものを余り気にとめまいとするもの、青年期の発達課題なんて気に掛けるものでもなかろうというようなトーンが伝わってくるものなど様々であった。ことさら熱くとらえて記述したものでも以下の3通り程に分かれていたと言えよう。

主観的、独善的、教条的に示すもの

学者の説を紹介したり整理したりしただけのもの

教育的愛情から語りかけの姿勢で主体的に記述したもの

倫理は、知識ではない。高校道徳教育は全ての教育活動を通して行うとされているが、それでも「倫理」はその中心的な科目としてとらえられている。道徳ということの連関からでも、「倫理」という科目が、知識のみを主要な関心事にしていけないということは容易に理解されるところである。

したがって、倫理の記述は難しい。人がその人格形成に学問を通して迫ろうとするとき、それは技(ここでは知識)だけの問題ではなくなるからである。授業者がこのことに気づいて「倫理」を読み直すとき、授業者もまた、自分の言葉で「倫理」を熱く語り始めるのである。その時始めて、例えば「教科教育法」なるものも成立するのである。

参考文献

- 「高等学校学習指導要領 平成21年3月告示」(文部科学省)
- 「高等学校学習指導要領解説 公民編 平成22年6月」(文部科学省)
- 「高等学校学習指導要領解説 公民編 平成元年12月」(文部省)
- 「高等学校学習指導要領解説 公民編 平成11年12月」(文部省)
- 「高等学校学習指導要領解説 公民編 平成11年12月 平成17年1月 一部補訂」(文部科学省)
- 「改訂版 高等学校 倫理」(佐藤正英他 数研出版 平成21年12月)
- 「高等学校 改訂版 倫理」(越智貢他 第一学習社 平成22年2月)
- 「現代の倫理 改訂版」(濱井修他 山川出版社 2010年3月)
- 「高校倫理」(古田光他 実教出版 平成22年1月)
- 「東学版 倫理」(湯浅泰雄他 山川出版社 2010年3月)
- 「倫理」(平木幸二郎他 東京書籍 平成22年2月)
- 「高等学校 新倫理 改訂版」(菅野覚明他 清水書院 平成22年2月)
- 「新倫理 自己を見つめて」(鷺田清一他 教育出版 平成22年1月)
- 「倫理」(城塚登他 実教出版 平成22年1月)
- 「速読速解 倫理」(東京大学受験公民研究会 学習研究社 2009年8月)
- 「センター試験のツボ 倫理」(中川雅弘 桐原書店 2009年7月)
- 「理解しやすい 倫理」(藤田正勝 文英堂 2008年4月)
- 「よくわかる 倫理」(葦名次夫他 学研教育出版 2010年3月)
- 「改訂版 倫理用語集」(濱井修他 山川出版 2009年11月)